

部活動報告

吹奏楽部の2年間を通じて (中)

峯岸 優介

Yusuke MINEGISHI

1. はじめに

平成28年4月1日に発行された本誌で、本校吹奏楽部の2014年～2016年の2年間のうちの初年度の1年間に感じたものや活動の上半期を紹介したので、今回は上半期に触れながら中期の活動を紹介していく。

2. 2014年(平成26年)7月～2014年9月までの活動報告

(1)「野球応援」から8月のコンクールまで

吹奏楽部員にとっての「夏」とは

他の部活動と同じように、吹奏楽部員にとっての夏は大変充実した時期となる。人によっては地獄の夏になる場合もあるし、好きなことに没頭できるため生き生きする場合もある。どちらにせよ、この夏は「野球応援」「ニューヨークシンフォニックアンサンブルとの共演」「夏合宿」「コンクール」と行事が盛りだくさんな時期であり、「部」としても「個人」としても成長できる時期であることは疑いない。また、数々のドラマが生まれるのも吹奏楽部の夏の醍醐味であろう。本校吹奏楽部はそのような熱い夏を迎えることになる。

試練と感動をもらった「野球応援」

まず、この「野球応援」という本番の最大の試練は「体力」である。真夏の炎天下で10曲近く吹き続けるということだけでも、相当な体力がいる。それに加えて、試合状況を判断して曲をすぐ吹き分ける必要がある。その場合、試合も指揮者も両方注意してみなければならぬ。このように「野球応援」では、真夏の炎天下の中、試合と演奏の両方に意識を向けるといって「体力」を要求されるという過酷なイベントなのだ。

しかし、悪いことばかりではない。同じ高校生が甲子園という夢の舞台を目指して必死にプレーする姿を見て、部員たちは「自分たちもやるぞ」という夏のコンクールへの決意を新たにするのであった。生徒の顔つきが心なしに逞しく見えた瞬間があり、「野球応援」を通して、自分のためではなく「人のために全力を尽くす」という「奉仕の精神」と、苦しい時も踏ん張るという「忍耐力」を学ぶことができたようである。(図1参照)

目から鱗が落ちる「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル」との共演

1、共演の経緯

本校の吹奏楽部員は野球応援での疲労と感動を経て、「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル」*¹⁾との共演を迎える。この共演は、本校の近くに位置する伊藤忠商事様が1992年より毎年メセナ活動*²⁾の一環として「伊藤忠ロビーコンサート」という企画で始めたもので、地元の学校ということでお招きしていただいて実現したものであった。この「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル」という団体は、ニューヨークを中心に第一線で活躍している演奏家で構成されているとてもハイレベルな団体であり、本校の生徒たちにとっては雲の上の存在と言っても過言ではない。そんな団体と共演させていただく機会をいただけて、生徒たちもとても興奮していたようである。また、この本番は芸術活動の拡大を意図したもので、ただ共演するというものではなく事前に本校でレッスンをしていただけたということになり、生徒たちはより一層興奮していた。

2、驚きの連続であった「事前レッスン」

6月の下旬、事前のレッスンの日が訪れる。この日は、指揮者の高原守先生とニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの数人のメンバーに来校していただき、レッスンを受ける運びとなっていた。まず、高原先生と通訳の伊藤様、クラリネット・トランペットのメンバーの方々に挨拶をして和やかな雰囲気でのレッスンが始まるが、合奏(レッスン)が始まると驚きの連続。高原先生の雄大な指揮に導かれるように生徒の音がどんどん明るくクリアになり、クラリネット・トランペットのメンバーの方々の熱量に充てられて生徒たちの演奏がどんどんダイナミックになっていく。指揮者やスーパープレイヤーの存在がバンドに大きな影響を与えることは知っていたが、この時に「これほどまで変わるものなのか」と改めて痛感させられた。この後も共演させていただく3曲(エルガー作曲「威風堂々」、「宇宙戦艦ヤマト組曲」、ショスタコーヴィチ作曲「ジャズ組曲」)で熱い指導を受け、最後に記念写真を撮らせていただいてこの日は終了した。生徒たちは「体の使い方」「フレーズのとらえ方」などについて多くの発見があったようで、この後もしばらく興奮冷めやらぬ状態であった(生徒の中にはトランペットのメンバーの方と英語でやり取りをして、その後もFacebookでやり取りをした者もいたようである)。

3、緊張と感動の本番

そして、ついに7月24日の本番の日を迎える。この日は昼頃まで学校で練習をした後、本番の会場である伊藤忠商事東京本社のロビーに移動した。「ロビーコンサート」と伺っていたので小ぶりな場所をイメージしていたが、実際に行ってみると天井がとても高く客席も800席近くあるという、ちょっとした小ホールのような場所であった。(図2参照)これには生徒たちも驚きを隠せない様子であったが、本番のリハーサルが始まると雰囲気は一変。弦楽器と一緒に

に吹いた経験が一度もない生徒が多く、弦楽器の包み込むような優しい音色にただただ酔いしれていた。事前のレッスンでは一部のパートのみのレッスンであったが、リハーサルでは共演させていただき同じパートの方々に自己紹介や質問する時間をいただいて、和やかにリハーサルは終了した。その後、緊張の本番が始まる。最初はニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの方々による演奏で、有名なオーケストラの曲からコンチェルト(1人のソリストとオーケストラが演奏する曲のこと。)まで様々な曲が用意されており、そのプログラムの後のアンコール時に本校生徒が共演させていただいた。司会でいらしていた竹下景子さんのユーモアたっぷりトークの後に「威風堂々」、「宇宙戦艦ヤマト組曲」、「ジャズ組曲」の3曲を演奏させていただき、盛況のうちに幕を閉じた。「ジャズ組曲」では本校顧問の瀬立聡先生のサクソのソロもあり、生徒も顧問も大変貴重な経験をさせていただいた。生徒たちはこの本番で「弦楽器の響き」というものに触れ、元気な演奏だけではなく「大人の音楽」を学んだようである。このような貴重な機会をいただいた伊藤忠商事株式会社様、ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの皆様に心からお礼申し上げます。

「地獄」の夏合宿

「ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル」との共演を終えた我々は、息つく暇もなく合宿に突入する。勉強との両立を図るために長期休暇中の活動時間が比較的短くなっている本校(9:00~15:30)で活動する吹奏楽部にとって、この夏の合宿は非常に重要な期間である。

この夏合宿はとにかく「練習」する。あっていなかった音程、縦のライン、イメージなど、普段の練習では手を付けることができない細かい部分を中心に練習を進めていく。ここで一番大事になることは、「チームワーク」である。なぜ「細かい練習」で「チームワーク」が大切になるのか。それは、自分の一番醜い「素の自分」が出てくるからである。この細かい練習はかなりの集中力を必要とするし、普段よりも長い時間練習するため、徐々に疲労が溜まっていく。そうすると「心が折れそうになる部員」、「イライラして不機嫌になる部員」、「他人を気にしすぎて自分の言いたいことが言えない部員」等、自分でも醜いと思う「素の自分」が出てくる。その時こそが一番の正念場である。いかに「チームワーク」で乗り越えられるか、これが一番問われるのである。人間誰もが弱い自分を持っていてそれを隠したいと思ってしまうが、60人以上で同じ音を奏でる「音楽」というものは表面上の付き合いだけでは作ることができない。だから時間が普段より時間が取れる合宿で「自分と向き合い、チームと向き合い、音楽と向き合う」ということを徹底的に行うのである。それは生徒にとって「地獄」であるかもしれないが、「一体感のある音楽」、「人に感動を与える音楽」を生み出す一番の近道であると信じて毎年合宿を行っている。

生徒・顧問共々毎日色々なことに向き合っているため当然ながら困難ばかりであったが、5日間を終えて少し凛々しくなった生徒たちを見て、顧問同士も胸を撫で下ろしたと同時にささ

やかな達成感を感じたのを覚えている。

「夏の集大成」、いざコンクールへ

1、トラブル続きの「前日合宿」

「地獄の夏合宿」を終え、部員たちを待ち構えるのはコンクールである。夏の合宿で得たものをさらに磨き上げ、出てきた課題を解消するため、本校の音楽室や講堂などで練習を積み、ついにコンクールの前日を迎えた。

この年はコンクールの前日にホールの近くで合宿を行い、朝から全員で練習をしてから本番に臨むというスケジュールになっており、学校での練習後に合宿所に移動した。「前日の夜だから、あとは調整するだけかな」と高をくくっていた自分にとって、自分のイメージをことごとく裏切られる一日となった。「本番の不安で泣き出す部員」、「極度の緊張によってビリビリする部員」、「心配で練習のし過ぎでコンディションを崩す部員」、「急に楽器が壊れてしまう部員」等、トラブルばかり起きてくる。顧問側も生徒の対応に追われ、副顧問の井畑先生は不安定な生徒の対応を、副顧問の自分は壊れた楽器の代わりの調達を、顧問の瀬立先生は全体の管理をするなど、「調整」とは180度真逆な一日となってしまった。しかし、このすべてが人間的なものであり、「人間ピンチの時ほど人間性が試されているものだな」とつくづく思うのであった。

2、「予想外」のコンクール本番

前日合宿のバタバタの中、コンクール当日を迎えることとなった。コンクール当日は7時頃から全体の練習がスタートする予定だったが、生徒の中では緊張と興奮で6時から練習を始める生徒もあり、いつもと違う様子が見て取れた。そんな緊張した生徒たちを見て不安を抱きながらも、会場である「府中の森芸術劇場」に移動した。そして、現地についたものの、楽器を準備する場所の狭さ、集合時間から本番までの時間の短さ等に動揺しながら、ようやくチューニング室（音だしの部屋）に到着した。ここで少し落ち着きを取り戻すかに見えたが、焦りがあるためか思うように音が合わない。最終的には音が合ってきたが、ひやひやしたウォームアップとなった。そして、係の高校生に連れられて舞台袖に到着し、本番まで待機となった。ただ、ここでも「予想外」のことが起きる。それは前の団体が普段よりもうまく聞こえてしまい、生徒たちがまた緊張してきてしまったのである。本番前は舞台「裏」ですら「魔の空間」になり得ることがよくわかる瞬間だった。

そうしてようやく本番が始まる。本番が始まりようやく吹っ切れたのか、心なしか普段よりも生き生きとした音が聞こえてくる。終わってみれば今までで一番良かった演奏であった。これも「予想外」であった。そうして、制限時間^{*3)}も問題なく終え、無事に演奏を終えることができた。

3、緊張の結果発表

演奏を終えると最後の試練である「結果発表」が訪れる。この結果発表で各学校が「銅賞、銀賞、金賞」に割り振られ、その日の上位6校程(日程や年によって各賞の数異なる)が吹奏楽部員の憧れである「金賞」を手にすることができ、その金賞を受賞した学校の中でも上位3校に入るといわゆる「都大会」に出場することができる。ただ、東京都は学校数がとても多く、この「都大会」が運動部という所の「関東大会」くらいの大会にあたるので、金賞は愚かなかなか「東京都の代表」になることも難しいのである。

本校の吹奏楽部はまず「金賞」を目指して努力してきて、演奏した会場にて結果発表を待つ。結果発表の前にプロの審査員の先生からいただくのだが、そのアドバイスは生徒にとってためになるものでありながらも、結果が気になりソワソワしているのが現状である。そして待ちに待った結果発表。銀賞と金賞は音で聞くと聞き取りづらいので、金賞の場合は「ゴールド金賞!」と発表される。そして、各学校の結果が着々と発表され、次に本校吹奏楽部の番になる。「ゴールド金賞」の「ゴ」の発表を期待しながらも、結果は「銀賞」。一瞬時が止まったような感覚に陥り、その後に現実に戻される。悔しくて泣きだす部員、淡々と現実を受け入れる部員等様々だが、なぜか結果を聞いた後に色々なことが冷静に考えられるようになり、「あの時にこうしておけば…」といった後悔が沸き起こってきた。しかし結果は銀賞だったが、「悔しさで泣きじゃくる部員」を見て、部員の成長と部の成長を感じることができ、「次はこの涙をうれし涙に変えたい」と強く思った本番でもあった。逃げずに最後まで戦った生徒たちを称えたい。

3. 終わりに

吹奏楽部での数か月を通して、部員や部活の変化、吹奏楽部の課題などを感じることができた。今回は、下半期の活動を報告する。

- *1 指揮者、高原守氏が率いるニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルは、1979年ニューヨーク・メトロポリタン室内楽団として発足し、その後まもなく現在の名称に改められ、2019年で40周年を迎える。団員は、メトロポリタン・オペラ・オーケストラのメンバーをはじめとした、ニューヨークを中心に第一線で活躍している演奏家で構成されており、メトロポリタン・オペラ・オーケストラとしての特色である優れた旋律が、彼らの創り出す音楽に備わっている。またソロ活動にも意欲的で、優れたキャリアを持つ有名なアーティストが多数加わっているため、ソロをフィーチャーした多くの作品をレパートリーとしている。

毎年、ニューヨークの国連本部で開催されるUNFPA(国連人口基金)の表彰式典では、世界中の受賞国の音楽をアレンジした演奏で好評を博しており、ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルの活動のユニークさは、いかにもニューヨークらしく明るくて透明で、心にしみる魅力的な演奏というだけでなく、世界中の若き演奏家達を育て、広く紹介しているという点にある。

指揮者の高原守氏はニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル(NYSE)の音楽監督兼常任指揮者。国立音楽大学卒業後レナード・バーンスタインのもとで指揮を学ぶため渡米し、そ

の後ニューヨークを拠点に指揮者として本格的な活動を始め、1979年にNYSEの前身であるニューヨーク・メトロポリタン室内管弦楽団の音楽監督に就任して以来、指揮者としての活動のみならず、NYSE全体のプロデュース、マネージャーにも携わり中心的な存在として活躍している。唐招提寺（奈良）、出雲大社（島根）等歴史的建造物で演奏したことが注目され好評を得た。平成21年度には外務大臣表彰を受賞している。

- * 2 企業が主として資金を提供して、文化・芸術活動を支援すること。
- * 3 吹奏楽のコンクールでは多くの団体を審査するため、課題曲＋自由曲という2曲（人数による編成（いわゆる「部門」のようなもの）によって1曲になる場合もある）を12分以内で終えなくては行けず、この時間を超えるとタイムオーバーで失格となってしまう。



図1：吹奏楽部活動報告（野球応援・演奏風景）



図2：吹奏楽部活動報告（伊藤忠サマーコンサート・演奏風景）